

旧研究所スタッフ随想 8

日本文化研究所との関わりを振り返って

平藤 喜久子

はじめに

はじめて日本文化研究所を訪れたとき、たくさんのパソコンや何に使うのかも想像できないような機器の数々に驚いた。その驚きは、研究所のあった常磐松 2 号館のアンティークなたたずまいの印象とかけ離れたイメージだったこともあるかもしれない。

学生の頃、パソコンとは、文章を作成し、ネットで調べ物をするためのものであると思っていた。「データベース」という発想を知ったのも、その常磐松 2 号館でのことである。

研究とは、資史料と向き合い、自分一人で行うものだった。広い年代の研究者が、得意分野を持ち寄って、次の世代に使ってもらえるものを作る意義と楽しさもここで学んだ。

今では当たり前となっている光景も、仕事の進め方も、発想法も、長い間積み上げられてきた先輩たちの工夫の上にあると感じる。母校がまさに自分を生み出してくれた場所であるなら、研究者として育ててくれたのは研究所だと感じている。

研究開発推進機構に改組される以前の日本文化研究所のことを知るものの一人として、ここ 10 年余りを振り返ってみたい。

1. 21 世紀 COE プログラムを通して

わたしが日本文化研究所と正式に関わりを持つのは 2002 年 10 月からである。この年、國學院大學は文部科学省の「世界的研究教育拠点の形成のための重点的支援——21 世紀 COE プログラム (Center of Excellence)」に「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」という研究課題で申請して採択された。

この研究プログラムの採択により、いくつもの試みがスタートしたが、そのなかに井上順孝先生が中心となる『神道事典』の英訳 Encyclopedia of Shinto の作成と国際シンポジウムの実施が含まれていた。博士論文を提出したばかりであったところに、この補助作業の声がかかったのだった。

日本文化研究所の共同研究員にさせていただき、いわゆるアルバイトとしてお手伝いをはじめた。遠藤潤先生とともに、翻訳者たちからの翻訳に関する問い合わせに返答するなどの、翻訳サポートという内容が中心だった。

2003 年の第 1 回国際シンポジウムは、「各国における神道研究の現状と課題」と題して行われた。2004 年度から COE 研究員として関わることとなるが、その年に行われた第 2 回のテーマは「〈神道〉はどう翻訳されているか」である。

今思うと Encyclopedia of Shinto の作成と国際シンポジウムという 2 つの仕事は、自分の研究にとっても大きな意味を持つこととなったと感じる。その一つは古事記など日本神話の翻訳の歴史と課題についての研究である。この研究は、現在國學院大學 21 世紀研究教育計画委員会研究事業「古事記学」の構築」と日本文化研究所の「デジタル・ミュージアムの



運営および日本の宗教文化の国際的研究と発信」における古事記の新たな英訳へとつながっている。

また各国における日本神話の研究史について関心を抱くようになった。国際シンポジウムを通して知り合うことのできた先生方とは今でも研究交流が続いており、大きな財産を得たと感じている。

2. 日本文化研究所の専任教員として

2005年には専任講師として採用していただくことになった。齊藤智朗先生、加藤里美先生と3人の着任だった。日本文化研究所が50周年を迎えた年である。そして常磐松2号館の解体も近づき、研究所も新たな体制になるらしいという時期でもあった。

今回、振り返るにあたり、その頃自分が作成したファイルを見てみたところ「研究所将来構想について」などと題する文書があった。今後のプロジェクトのあり方と、若手研究員の育成について書いたものだったが、書いた記憶もなければ、どの会議体に出したものかも憶えていない。

学術メディアセンターがどのような建物になるのかという設備面と研究所がどうなるのかという組織面と、大きな変化が来そうだという雰囲気の中かで若手としていろいろ考えるところがあったのだろう。

この頃の印象的な出来事は日本文化研究所の50周年事業と引越しである。過去のアルバムをひっくり返し、いろんな意味で貴重な諸先輩方の写真をデジタル化する作業を行った。研究所の歴史や偉大な研究者のオフの顔を知ることができ、大変良い勉強になった。

50周年記念事業としては公開講演会を2007年の1月に行った。国立民族学博物館の吉田憲司先生が「情報装置としてのミュージアム」と題する講演を、東京大学大学院の坂村健先生が「文化を支えるコンピュータ」と題する講演を行った。この講演を受けて、「ひらかれる学術資産—学術メディアセンターの展望—」をテーマとする国際シンポジウムも実施した。

新たにできる学術メディアセンターのなかに博物館が設けられるということのほかに、こ

れまでの学術資産や 21 世紀 COE プログラムで形成された神道研究の拠点を「デジタル・ミュージアム」という姿にしてオンラインで発信していこうという構想があったためである。日本文化研究所が研究開発推進機構に改組されていく転換点を象徴するような講演会、シンポジウムであったと思う。

常磐松 2 号館から仮住まいの本館への引越しは松本久史先生の強力なリーダーシップのもとで行われた。わたしの研究室は幸い国際交流センターにあったため、自分の荷物については引っ越し必要はなかったが、研究所全体では大変な分量であった。「新しいぶどう酒は新しい皮袋に」のように、新しい建物は新品のもので満たされるようなイメージを持っていたが、「歴史ある」道具類の多くは常磐松 2 号館から本館へ、そして学術メディアセンターへと引越しを繰り返すことになった。

さて、かつての日本文化研究所は、プロジェクト制を取っていた。学内外の研究者が集い、共同研究を行う「総合プロジェクト」と専任教員が中心となる比較的小規模の「専任プロジェクト」、学部の教員による「兼担プロジェクト」があった。着任したばかりの若手でも、予算を得て専任プロジェクトの担当者となることができるという、とてもありがたい制度だった。自分で研究計画を立案し、予算を組み立てることができる専任プロジェクトは、科研応募へのステップにもなっていた。

21 世紀 COE プログラムも継続しており、その研究事業の推進、総合プロジェクトの推進、加えて専任プロジェクトがあったことになる。慣れないうちは、なにから手をつけてよいのやら、という感じであったが、次第に多様な仕事に関わることが自分の研究の推進力になるという感覚も出てくるようになった。

所内研究会もあり、他のプロジェクトの専任の先生、若手の兼任講師の研究発表を聞くこともできた。自分も発表し、普段あまり話をする機会のなかった先生に意見をいただくことができたのも貴重な体験であった。

現在の研究開発推進機構よりも規模は小さかったが、多様な研究、研究者との接点は今以上に多かったように感じることもある。

ちなみに日本文研究所内の役割分担のなかには「行事委員」というのがあり、納涼会と忘年会、送別会を業務として企画していた。このとき渋谷の店を探した経験は、今も活かされる機会が多い。この委員は研究開発推進機構でも設けたらいいのではないかと感じる。

3. 研究開発推進機構になってから

2007 年 4 月に研究開発推進機構が発足し、日本文化研究所はその一機関に位置づけられた。

1 神道・国学研究部門

2 国際交流・学術情報発信部門

上記の 2 つの研究部門が設けられ、わたしは国際交流・学術情報発信部門の一員としてデジタル・ミュージアムの構築、国際研究フォーラムの実施に関わっていくことになった。

デジタル・ミュージアムは、2009 年度に正式に稼働をはじめ、現在では 30 近いデータベースを閲覧することができる。ミュージアムらしさやデータベース間の相互参照、Encyclopedia of Shinto の使い勝手など、まだまだ良くしたいと思うところはあるが、毎年着々と改良を重ねている。

2014 年にはスマートフォンアプリ「ロケスマ」との連携もはじまり、地図をベースにし

たデジタル・ミュージアムのあり方というものも展開している。今後も地図だけでなく、年表やカレンダーなどのツールもミュージアムの発信媒体として検討してみたい。

国際研究フォーラムは2008年から行われている。21世紀COEプログラムで行っていた国際シンポジウムの後継と位置づけ、毎年さまざまな研究者を招聘している。2003年から振り返れば、相当な数の研究者が國學院大學を訪れたことになる。最初に招聘した先生の弟子がパネリストとして招聘されるようになるなど、企画者側とともに招聘される研究者も世代交代が進んでいる。こうして築かれた交流の拠点となる海外の研究機関との関係は今後も大切にしていきたい。

国際シンポジウム、国際研究フォーラムは、海外の一線で活躍する研究者と直接知り合いになることのできるきわめて貴重な機会である。日本文化研究所の若手研究者はいうまでもなく、広く大学内外の研究者が、この機会を活かして視野を広げ、交流の手がかりをつかみ、研究の展開につなげて欲しいと心から思っている。

これまではそうした機会を享受する側という意識があったが、今後は機会を提供する側として、尽力していきたい。

おわりに

とりとめもなく十年余りを振り返り、今後の抱負などを記してみた。毎年たくさんのイベントもあり、一つ一つを振り返れば時間も紙もいくらあっても足りない。そのわりに十年ほど前のことだと忘れていても多く、われながらぞっとした。

幸いなことに研究開発推進機構になってからはこの『日本文化研究所年報』が毎年刊行されており、年ごとに大きなイベントや出張などがまとめられている。これはとても便利だ。

忘れてはいけないこと、伝えておいたほうが良いことをどのように記憶しておくか。個人としても組織としても工夫が必要なのだろう。



2008年国際研究フォーラム